

エレミヤ書24-27章「バビロンに服する心」

1A 捕囚後の良い実 24

1B 良くされる捕囚の民 1-7

2B 悪くなる残りの者 8-10

2A 万国への裁き 25

1B ユダに対して 1-14

1C 二十三年の預言 1-7

2C 七十年捕囚 8-14

2B 異邦人に対して 15-38

1C 怒りの杯 15-29

2C 吼える獅子 30-38

3A 首長に対して見せた手本 26

1B 宮の破壊 1-19

1C 怒る祭司と預言者 1-11

2C エレミヤの弁明 12-19

2B 逃げる預言者 20-24

4A バビロンの枷 27

1B 諸国に対して 1-11

1C 神の主権 1-7

2C 反逆への警告 8-11

2B 王と祭司に対して 12-22

本文

エレミヤ書 24 章を開いてください。今日は 24 章から 27 章まで読んでいきたいのですが、24 章は既に午前礼拝で読みました。午前礼拝でお話ししなかった分を補って、それから 25 章に入りたいと思います。

1A 捕囚後の良い実 24

1B 良くされる捕囚の民 1-7

24:1 バビロンの王ネブカデレザルが、エホヤキムの子、ユダの王エコヌヤと、ユダのつかさたちや、職人や、鍛冶屋をエルサレムから捕え移し、バビロンに連れて行って後、主は私に示された。見ると、主の宮の前に、二かごのいちじくが置かれている。24:2 一つのかごのは非常に良いいちじくで、初なるのいちじくの実のようであり、もう一つのかごのは非常に悪いいちじくで、悪くて食べられないものである。」24:3 そのとき、主が私に、「エレミヤ。あなたは何を見ているのか。」と言われたので、私は言った。「いちじくです。良いいちじくは非常に良く、悪いのは非常に悪く、悪くて食

べられないものです。」24:4 すると、私に次のような主のことばがあった。24:5 「イスラエルの神、主は、こう仰せられる。この良いいちじくのように、わたしは、この所からカルデヤ人の地に送ったユダの捕囚の民を良いものにしようと思う。24:6 わたしは、良くするために彼らに目をかけて、彼らをこの国に帰らせ、彼らを建て直し、倒れないように植えて、もう引き抜かない。24:7 また、わたしは彼らに、わたしが主であることを知る心を与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らが心を尽くしてわたしに立ち返るからである。

エコヌヤあるいはエホヤキムたちが、バビロンに捕え移された第二次バビロン捕囚の後、主の言葉は、「悔い改めなさい、主が災いを思い直される」という言葉から、「バビロンに仕えなさい、そうすれば後に幸いを見ることができる。」という預言に変わっています。ユダの中にある古きものを取り除くために、バビロンを神は器として用いられます。ゆえに、へりくだってバビロンに服することこそ神の御心に従うことであり、幸せを得ることができます。7 節にある、彼らが主を知るようになるという約束は、29 章以降に主が語られる幸いな計画で詳しく語られます。それは、シナイ山で主が与えられたモーセを仲介した契約ではなく、新しい契約の中で与えてくださるものです(エレミヤ 31:31-34)。

2B 悪くなる残りの者 8-10

24:8 しかし、悪くて食べられないあの悪いいちじくのように、..まことに主はこう仰せられる。..わたしは、ユダの王ゼデキヤと、そのつかさたち、エルサレムの残りの者と、この国に残されている者、およびエジプトの国に住みついている者とを、このようにする。24:9 わたしは彼らを地のすべての王国のおののき、悩みとし、また、わたしが追い散らすすべての所で、そしり、物笑いの種、なぶりもの、のろいとする。24:10 わたしは彼らのうちに、剣と、ききんと、疫病を送り、彼らとその先祖に与えた地から彼らを滅ぼし尽くす。」

これは、紀元前 586 年の第三次バビロン捕囚のことです。ゼデキヤ王そして残りの者は、バビロンに結局、従わざるをえなくなったのであり、エホヤキンの時と同じなのですが、しかし神の厳しい刑罰の中で従わざるを得なくなったということです。ここに「地のすべての王国のおののき、悩み」とあります。一国の悲劇ではなく、主はこれを世界に対して、「神が生きておられる」ということを思わざるをえない世界的出来事にされる、ということです。これが 25 章から 27 章にも貫かれているテーマとなります。

神の力強い主権の中に服する時に、人は幸いを得ます。そうでなければ、結局従わないといけないのですが、災いを受けます。バベルの塔の事件がそうでした。主は、「生めよ、増えよ、地を満たせ」とノアの家族に祝福命令を与えられたのに、その子孫は一つ所に集まり、町を建て、塔を建て、そして「私たちが散らされないように。」と言いました。主の命令に反抗したのです。しかし主は、言葉を混乱させ、彼らが一つ所で住むことができないようにさせ、地に散らしていかれたのです。そして、「イエスが主」と告白することが、全ての人に呼びかけられています。「ピリピ 2:10-11 それ

は、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかかめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」今の時にこの方が主であると告白するのであれば、それは救われるための告白ですが、拒むのであれば、それは強制されて言わされているのであり、その人たちは火と硫黄の池に投げ込まれるのです。

2A 万国への裁き 25

1B ユダに対して 1-14

1C 二十三年の預言 1-7

25:1 ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの第四年、すなわち、バビロンの王ネブカデレザルの元年に、ユダの民全体についてエレミヤにあったみことば。

エホヤキムはエホヤキンの父ですから、時代的には遡っています。そして、「バビロンの王ネブカデレザルの元年」ですが、紀元前 605 年のことです。ダニエル書 1 章に拠りますと、この時に第一次バビロン捕囚が起こっています。そして、ここから大きく世界情勢が変わります。エジプトの勢力が衰え、バビロンが隆盛し、そしてネブカデネザルによって「新バビロニア帝国」という、バビロンの世界帝国化が確立するからです。したがって、バビロンはユダだけに關わるのではなく、その周囲の国々にも大いに關係する出来事となっています。

25:2 これを預言者エレミヤは、ユダの民全体とエルサレムの全住民に語って言った。25:3 アモンの子、ユダの王ヨシヤの第十三年から今日まで、この二十三年間、私に主のことばがあり、私はあなたがたに絶えず、しきりに語りかけたのに、あなたがたは聞かなかった。25:4 また、主はあなたがたに、主のしもべである預言者たちを早くからたびたび送ったのに、あなたがたは聞かず、聞こうと耳を傾けることもなかった。25:5 主は仰せられた。「さあ、おのおの、悪の道から、あなたがたの悪い行ないから立ち返り、主があなたがたと先祖たちに与えた土地で、いつまでも、とこしえに住め。25:6 ほかの神々に従い、それに仕え、それを拝んではならない。あなたがたが手で造った物によって、わたしの怒りを引き起こしてはならない。そうでないと、わたしもあなたがたにわざわいを与える。25:7 それでも、あなたがたはわたしに聞き従わなかった。…主の御告げ。…それで、あなたがたは手で造った物でわたしの怒りを引き起こし、身にわざわいを招いた。」

エレミヤが預言者として召されたのは、ヨシヤ王の第十三年の時とありますが、1章の始まりに書いてあります。つまり、エレミヤが預言活動を始めて以来と言うことです。二十三年経っていますが、それでも彼らは主の声に聞き従っていなかったのです。これは、人の頑なさを表していますし、また神の忍耐深さを表しています。主は一人でも滅びることなく、悔い改めて救われることを願っておられます。ゆえに、彼らが災いを受ける時は、ここに「身にわざわいを招いた」とあるように、自分たちで招いたものなのです。私たちはとかく、「怒りを表す神は恐ろしい、不公平だ。」と感じますが、いいえ、「自ら、災いを道を選んでいるのだ。」と言ったほうが正しいです。

2C 七十年捕囚 8-14

25:8 それゆえ、万軍の主はこう仰せられる。「あなたがたがわたしのことばに聞き従わなかったために、25:9 見よ、わたしは北のすべての種族を呼び寄せる。…主の御告げ。…すなわち、わたしのしもべバビロンの王ネブカデレザルを呼び寄せて、この国と、その住民と、その回りのすべての国々とを攻めさせ、これを聖絶して、恐怖とし、あざけりとし、永遠の廃墟とする。25:10 わたしは彼らの楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、ひき臼の音と、ともし火の光を消し去る。

「北のすべての種族」とありますが、バビロンが征服した他の民族も合わせて軍隊を組み、そして北の地域から攻めてくるということです。そして、ここで驚くべきことは、「わたしのしもべバビロンの王ネブカデレザル」と、主がネブカデネザルをご自分のしもべと呼ばれていることです。主との個人的、人格的な関わりを持っている者たち、例えばアブラハムやダビデなどにこの名が使われ、メシヤご自身も、「わたしのしもべ」とイザヤ書では呼ばれていました。

しかし、主は、異教徒をもご自分のしもべと呼ばれて、そして御心を行なわれる時があります。ペルシヤの王クロスが、それでした。クロスがバビロンを倒し、ユダヤ人を解放し、エルサレムに帰還させるのに神が用いられました。それは、神がご自分の民を、世界を裁くことによって救われ、彼らを帰還させる終わりの日を予め示していました。イエス・キリストが再臨される時に、このこと行なわれます。そして、バビロンの王ネブカデネザルも同じなのです。彼は、ユダに対して、また国々に対して、神の怒りを現わすために用いられる器なのです。バビロンの動きを見て、神が後の日に世界に対して何を行なわれるのかを予め示しているものであります。終わりの日には、国と国が戦い、民と民が戦います。そして、反キリストが現れて世界を荒らします。しかし、反キリスト自身はキリストによって滅ぼされます。こうした神の裁きのご計画を、ネブカデネザルは予め示していたのです。

ネブカデネザルは横暴な王であり、バビロンは悪であるけれども、その悪に神の聖い御旨が啓示されます。私たちは、世界で起こっている悪について、まるで他人行儀のように裁いたり、反対していたら神の御心を見失うこととなります。神は、ナチス・ドイツによって人がどこまで悪に満ちているのか、その潜在性を露わにされました。ユダヤ人への取り扱いを見て、ドイツは悪い国だと他人行儀になることは決してできず、私たちの心にある悪をあぶり出すようになっています。このことによって、人というのは善ではないということを知ることほど示されるのです。このような形で、主は悪さえも私たちに、聖めをもたらすために用いられるのです。

25:11 この国は全部、廃墟となって荒れ果て、これらの国々はバビロンの王に七十年仕える。
25:12 七十年の終わりに、わたしはバビロンの王とその民、…主の御告げ。…またカルデア人の地を、彼らの咎のゆえに罰し、これを永遠に荒れ果てた地とする。25:13 わたしは、この国について語ったすべてのことば、すなわち、エレミヤが万国について預言し、この書にしるされている事をみな、この地にもたらす。25:14 多くの国々と大王たちが彼らを奴隷に使い、わたしも彼らに、そ

のしわざに応じ、その手のわざに応じて報いよう。」

主は、バビロンがユダヤ人を捕え移してから、自らが滅びるまでの期間を七十年とお定めになりました。私たちもこの長さを体感できるのではないのでしょうか、去年がちょうど終戦から七十年でした。そして、その時はバビロン自身を裁かれます。ユダを裁かれる時は、それは永遠の滅びを意味していませんでしたが、バビロンに対しては永遠の滅びを定めておられます。そして、神はバビロンのした悪を用いられました、その行なった悪に対しての報いを神はきちんと彼らに与えられます。「多くの国々と大王たち」というのは、メディア・ペルシヤの連合軍のことです。彼らがバビロン人たちを奴隷として使役します。ですから、神は悪をさへご自分の栄光のために用いられませんが、その悪については必ず報いてくださる方です。すべての不条理、すべての矛盾、すべての悪について、どうか神が余裕をもって裁いてくださるという信仰を持ってください。国々が神とキリストに逆らうために集まる時、詩篇第二篇では、「天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者をあざけられる。(4節)」とあります。

2B 異邦人に対して 15-38

1C 怒りの杯 15-29

25:15 まことにイスラエルの神、主は、私にこう仰せられた。「この憤りのぶどう酒の杯をわたしの手から取り、わたしがあなたを遣わすすべての国々に、これを飲ませよ。25:16 彼らは飲んで、ふらつき、狂ったようになる。わたしが彼らの間に送る剣のためである。」25:17 そこで、私は主の御手からその杯を取り、主が私を遣わされたすべての国々に飲ませた。

エレミヤが、人々の注意を引き寄せるための行動による預言を行なっています。それは、おそらくバビロンに対抗するために、軍事同盟や協力を持つためにエルサレムにやって来ている国々の使者に対して、エレミヤが行なっているのかもしれませんが。あるいは、彼はユーフラテス川まで行き、そこにある帯を取りにいって預言もありましたから、長旅に出かけて、このことを行なったのでしょうか。「ぶどう酒の杯」を飲みなさいと言って、この預言を行ないました。神の怒りを現わし、酔いが回っている姿は、その怒りをもろに受けている姿を表しています。

預言書の随所に現れる表現であり、黙示録 14 章にも出てくる表現です。「14:9-10 また、第三の、別の御使いも、彼らに続いてやって来て、大声で言った。「もし、だれでも、獣とその像を拝み、自分の額か手かに刻印を受けるなら、そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。」そして私たちは何よりも、主イエス様のことを思わざるを得ません。主が、「この杯を取り去ってください」と願われたのは、まさに私たちの罪に対する神の怒りの杯だったのです。

25:18 エルサレムとユダの町々とその王たち、つかさたちに。…彼らを今日のように廃墟とし、恐怖とし、あざけりとし、のろいとするためであった。…25:19 エジプトの王パロと、その家来たち、つ

かさたち、すべての民に、25:20 すべての混血の民、ウツの地のすべての王たち、ペリシテ人の地のすべての王たち・アシュケロン、ガザ、エクロン、アシュドデの残りの者・に、25:21 エドム、モアブ、アモン人に、25:22 ツロのすべての王たち、シドンのすべての王たち、海のかなたにある島の王たちに、25:23 デダン、テマ、ブズ、こめかみを刈り上げているすべての者に、25:24 アラビアのすべての王たち、荒野に住む混血の民のすべての王たちに、25:25 ジムリのすべての王たち、エラムのすべての王たち、メディアのすべての王たちに、25:26 北国のすべての王たち、近い者も遠い者もひとりひとりに、地上のすべての王国に飲ませ、彼らのあとでバビロンの王が飲む。

なんと広範囲で徹底的な裁きでしょうか。エルサレムとユダの町々から始まり、その周囲の国々が飲んでいきます。エジプト、ペリシテ、エドム、モアブ、アモン、レバノンにあるツロ、シドン、そしてアラビア半島の国々、そしてエラムはイラン、メディアはイラク北部の辺りです。そして、北の王国も数多くありますが、これらがすべてバビロンによって倒されていきます。神の怒りがバビロンによって示されたのです。しかし、そのバビロンをも神は裁かれます。

25:27 「あなたは彼らに言え。『イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。飲んで酔い、へどを吐いて倒れよ。起き上がるな。わたしがあなたがたの間に剣を送るからだ。』25:28 もし、彼らが、あなたの手からその杯を取って飲もうとしなければ、彼らに言え。『万軍の主はこう仰せられる。あなたがたは必ず飲まなければならない。25:29 見よ。わたしの名がつけられているこの町にも、わたしはわざわいを与え始めているからだ。あなたがたが、どんなに罰を免れようとしても、免れることはできない。わたしが、この地の全住民の上に、剣を呼び寄せているからだ。・万軍の主の御告げ。』

彼らは受け取るのを拒否しても、それでも裁きが来ることを宣言しました。裁きを免れようとしても、免れることはできないということです。すでにエルサレムにおいて裁きが始まっているのに、あなたがたも免れないと言っています。

2C 叫ぶ獅子 30-38

25:30 あなたは彼らにこのすべてのことばを預言して、言え。『主は高い所から叫び、その聖なる御住まいから声をあげられる。その牧場に向かって大声で叫び、酒ぶねを踏む者のように、地の全住民に向かって叫び声をあげられる。25:31 その騒ぎは地の果てまでも響き渡る。主が諸国の民と争い、すべての者をさばき、悪者どもを剣に渡されるからだ。・主の御告げ。』25:32 万軍の主はこう仰せられる。見よ。わざわいが国から国へと移り行き、大暴風が地の果てから起こる。25:33 その日、主に殺される者が地の果てから地の果てまでに及び、彼らはいたみ悲しまれることなく、集められることなく、葬られることもなく、地面の肥やしとなる。』

ここは、バビロンによる国々の滅びや荒廃の範囲をはるかに超えてしまっている幻です。実に、終わりの日に神の用意されている世界的な裁きを預言しているものです。主が天の住まいから降

りてこられて、これらのことを行なわれます。そして牧場に獅子が入ってきて羊たちの肉を食らうように表現してあります。そして、酒ぶねを使っても表現しています。ぶどうを踏めば、ぶどうの汁が出てくるのですが、そのように流血が起こることも語っておられます。これは、黙示録 14 章にも書かれています。「14:19-20 そこで御使いは地にかまを入れ、地のぶどうを刈り集めて、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れた。その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て、馬のくつわに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。」

25:34 牧者たちよ。泣きわめけ。群れのあるじたちよ。灰の中にくろげ回れ。あなたがたがほふられ、あなたがたが散らされる日が来たからだ。あなたがたは美しい雄羊のように倒れる。25:35 逃げ場は牧者たちから、のがれ場は群れのあるじたちから消えうせる。25:36 聞け。牧者たちの叫び、群れのあるじたちの泣き声を。主が彼らの牧場を荒らしておられるからだ。25:37 平和な牧場も、主の燃える怒りによって荒れすたれる。25:38 主は、若獅子のように、仮庵を捨てた。主の燃える剣、主の燃える怒りによって、彼らの国が荒れ果てるからだ。

牧者たちでさえ、食い殺されていく姿です。これは国々の指導者さえも無残に殺されていく姿があります。大抵、国の指導者は最後まで守られますね。戦争が起これば、地下壕にある司令室に移動し、そこから指揮を取るといふように。けれども、その彼らまでが食いちぎられるということですから、徹底的に滅ぼされることを意味します。

3A 首長に対して見せた手本 26

1B 宮の破壊 1-19

1C 怒る祭司と預言者 1-11

26:1 ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの治世の初めに、主から次のようなことばがあった。26:2 「主はこう仰せられる。主の宮の庭に立ち、主の宮に礼拝しに来るユダのすべての町の者に、わたしがあなたに語れと命じたことばを残らず語れ。一言も省くな。26:3 彼らがそれを聞いて、それぞれ悪の道から立ち返るかもしれない。そうすれば、わたしは、彼らの悪い行ないのために彼らに下そうと考えていたわざわいを思い直そう。26:4 だから彼らに言え。『主はこう仰せられる。もし、あなたがたがわたしに聞き従わず、あなたがたの前に置いたわたしの律法に歩まず、26:5 わたしがあなたがたに早くからたびたび送っているわたしのしもべである預言者たちのことばに聞き従わないなら、あなたがたは聞かなかつた。』26:6 わたしはこの宮をシロのようにし、この町を地の万国ののろいとする。』」

エホヤキムの治世の初めなので、25 章よりさらに 3-4 年さかのぼってエレミヤが預言しています。この説教の内容はすでに、7 章に出てきました。「あなたがたは、『これは主の宮、主の宮、主の宮。』と言っているが、宮があるからといって安全なのではない。行ないを改めなければ、この宮はシロようになる。」というものです。ペリシテ人によって神の箱が持って行かれた時のようになる、ということです。そしてここでは、エレミヤがどのようにその預言を受けたのかが書かれており、

それから、人々がどのように聞いて反応したのかが書かれています。

主が初めに、「一言も省くな」と言われています。語る者が語りたくない内容のものも、含めて語りなさいということです。全てを語るということは、勇気の要ることですがそれでもやらねばいけません。それから、「わざわざを思い直そう」と言われています。主は、神殿を破壊したくて破壊するのではありません。むしろ、彼らが救われてほしいと願われています。ですから、「滅ぼす」と断言されても、宿命的に滅ぼすのではないのです。悔い改めたら、下すと宣言された破壊は思い直されます。それでは、次に祭司と預言者がどう反応したかを見ましょう。

26:7 祭司と預言者とすべての民は、エレミヤがこのことばを主の宮で語っているのを聞いた。
26:8 主がすべての民に語れと命じたことをみな、エレミヤが語り終えたとき、祭司と預言者とすべての民は彼を捕えて言った。「あなたは必ず死ななければならない。26:9 なぜ、主の御名により、この宮がシロのようになり、この町もだれも住む者のいない廃墟となると言って預言したのか。」こうしてすべての民がエレミヤを攻撃しに、主の宮に集まった。26:10 ユダの首長たちはこれらのことを聞いて、王宮から主の宮に上り、主の宮の新しい門の入口にすわった。26:11 祭司や預言者たちは、首長たちやすべての民に次のように言った。「この者は死刑に当たる。彼がこの町に対して、あなたがたが自分の耳で聞いたとおりの預言をしたからだ。」

神殿がシロのようになると言われたので、最も反応したのは祭司たちでした。そして、その考えに追従している預言者たちが責めています。けれども、彼らの手で死刑にすることはできません。首長たちが死刑の判決を下すことができます。それで、「新しい門の入口」とあります。当時は町の門に、行政手続きをするところがありましたが、そこでエレミヤに対する判決を下すために集まりました。

興味深いのは、その訴状が「彼がこの町に対して預言をしたからだ」と、神の宮に対する預言は抜けていることです。なぜなら、訴えている相手はユダの首長であり、司法的なことしか扱ってこないことを知っていたからです。同じ話が新約聖書にも出てきます。私たちの主がユダヤ人宗教指導者に訴えられた時に、大祭司がイエス様を死刑にすると決めた時、それはイエス様が神の子キリストであることを認められたからでした。けれども、本当に死刑を執行する権力が与えられているローマ総督ピラトに対しては、「彼はユダヤ人の王だと自称し、カエザルに背いています。」という訴えをしました。政治問題に変えないと取り入ってもらえないからです。

2C エレミヤの弁明 12-19

26:12 エレミヤは、すべての首長とすべての民に告げてこう言った。「主が、あなたがたの聞いたすべてのことばを、この宮とこの町に対して預言するよう、私を遣わされたのです。26:13 さあ、今、あなたがたの行ないとわざを改め、あなたがたの神、主の御声に聞き従いなさい。そうすれば、主も、あなたがたに語ったわざわざを思い直されるでしょう。26:14 このとおり、私はあなたがたの手

の中にあります。私をあなたがたがよいと思うよう、正しいと思うようにしなさい。26:15 ただ、もしあなたがたが私を殺すなら、あなたがた自身が罪のない者の血の報いを、自分たちと、この町と、その住民とに及ぼすのだということを、はっきり知っていてください。なぜなら、ほんとうに主が、私をあなたがたのもとに送り、あなたがたの耳にこれらすべてのことばを語らせたのですから。」

エレミヤが弁明しています。第一に 12 節、「主が私を遣わされた」といっており自分勝手に語っているのではなく、主が語っておられるのだということです。第二に、「あなたがたが行ないを改めれば、主も災いを思い直される」というものです。そして、ここが大事ですが第三に、「私はあなたがたの手のの中にあります」と言っています。エレミヤは権威に服従しています。「罪のない者の血の報いを受ける」という警告は話していますが、あなたがたは私に対して行なうことは甘んじて受けます、という態度を取っています。

ここが、これまで見てきている「バビロンの服する」というテーマにつながっているところであります。主の権威の下に自分はいるのですが、同じ主がこれらの上に立っている者たちに権威を与えているということです。したがって、その権威をもって間違ったことを行なったとしても、その権威に服する姿勢が必要です。それは同意するということではありません。エレミヤがしているように、無実の者を殺したら、その報いは必ず執行者の上を下ります。けれども、エレミヤは抵抗しなかったのです。「このとおり、私はあなたがたの手のの中にあります。私をあなたがたがよいと思うよう、正しいと思うようにしなさい。」と言っています。ローマ 13 章に、「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。(1 節)」とあります。そして、このように権威に服する姿勢にこそ、神の権威と力が現れるということを知る必要があります。次をご覧ください。

26:16 すると、首長たちとすべての民は、祭司や預言者たちに言った。「この人は死刑に当たらない。私たちの神、主の名によって、彼は私たちに語ったのだから。」26:17 それで、その地の長老たちの幾人かが立って、民の全集団に語って言った。26:18 「かつてモレシエテ人ミカも、ユダの王ヒゼキヤの時代に預言して、ユダのすべての民に語って言ったことがある。『万軍の主はこう仰せられる。シオンは畑のように耕され、エルサレムは廃墟となり、この宮の山は森の丘となる。』」26:19 そのとき、ユダの王ヒゼキヤとユダのすべての人は彼を殺しただろうか。ヒゼキヤが主を恐れ、主に願ったので、主も彼らに語ったわざわいを思い直されたではないか。ところが、私たちは我が身に大きなわざわいを招こうとしている。」

彼らはエレミヤの弁明に納得しました。まず、「主の名によって、彼は私たちに語ったのだから」と言っています。今の時代でいうならば、「彼は自分の意見ではなく、聖書によって語っているのだから。」ということです。そして、主が思い直される方であることも、預言者ミカの語った言葉に対して、当時の王ヒゼキヤがどうしたかを引き合いに出しています。このような正しい判断をすることができましたが、もしエレミヤが彼らに判決をゆだねなかったら、彼らはそのような判断さえできな

ったと言えるでしょう。むしろエレミヤに対して、権威に逆らった罪によって捕えてしまうかもしれません。ここに、権威に服することがいかに大事であることを示しています。

そして興味深いのは、「すべての民は」とある点です。先に 8 節で、「祭司と預言者とすべての民は」と言っており、そして 11 節に「首長たちやすべての民に」とあり、そして 16 節に「首長たちとすべての民は」とあるのです。民は祭司と預言者の言っていることにうなずいて、けれども、エレミヤの弁明も聞き、そして首長たちの言っていることにもうなずいているという、そのまま流れにそのまま乗っかっているのです。したがって、私たちは、第一に指導者というものはものすごい大きな影響力を持っているということ、彼ら自身が自覚しなければならないこと。第二に、群衆から、イエス様に従う弟子にならないといけないことです。イエス様の時の群衆がそうでした。イエス様が十字架につけられる日の最後の週、日曜日にエルサレムに入られた時のことを思い出してください。群衆は、「ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。(マタイ 21:9)」と言って、イエス様をメシヤとして喜び迎え入れたのです。ところが四・五日経ったら、「十字架につけろ」と叫びました。祭司長らに煽動されていたからです。

2B 逃げる預言者 20-24

26:20 ほかに主の名によって預言している人がいた。すなわち、キルヤテ・エアリムの出のシェマヤの子ウリヤで、彼はこの町とこの国に対して、エレミヤのことばと全く同じような預言をしていた。26:21 エホヤキム王と、そのすべての勇士や、首長たちは、彼のことばを聞いた。王は彼を殺そうとしたが、ウリヤはこれを聞いて恐れ、エジプトへ逃げて行った。26:22 そこでエホヤキム王は人々をエジプトにやった。すなわち、アクボルの子エルナタンに人々を同行させて、エジプトに送った。26:23 彼らはウリヤをエジプトから連れ出し、エホヤキム王のところに連れて来たので、王は彼を剣で打ち殺し、そのしかばねを共同墓地に捨てさせた。26:24 しかし、シャファンの子アヒカムはエレミヤをかばい、エレミヤが民の手に渡されて殺されないようにした。

真の預言者は、エレミヤだけではありませんでした。主はいつでも残りの民を置いてくださっています。預言者エリヤが主に対して、「彼らはあなたの預言者たちを殺し、私だけが残されました。」と言いましたが、主は、「バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある。(ローマ 11:4)」と言われました。しかしウリヤは自分の命を救おうとして、それを失いました。けれども、「私はあなたがたの手の中にあります。」と言ったエレミヤは、エルサレムの町の中にいながらなお生き延びていました。このことで私たちはウリヤが神に不従順だったと言うことはできませんが、けれども、エレミヤについて言うならば、彼は上の権威に対して服従しており、主はその中でエレミヤを守ってくださいました。全てのことを主に任せたのです。

そして、首長たちの中にも主の言葉を聞いていた者たちがいました。エレミヤをかばった「アヒカム」という人ですが、この家族には主の言葉を恐れていた人が多かったことを聖書の中で知ることができます。父の「シャファン」は、ヨシヤに神殿の中で見つかった律法の書を持って行って、王の

前で読み上げた書記です(2列王 22:10)。そしてシャファンの他の息子「ゲマルヤ」はユダの首長の一人で、エレミヤの預言の書を王エホヤキムが焼いているのを「焼かないでください」と願っています(エレミヤ 36:25)。ゲマルヤの子「ミカヤ」が、ユダの首長たちにエレミヤの預言を首長たちに持ってきました。さらにシャファンのもう一人の子「エルアサ」は、バビロンに捕え移された人たちに宛てたエレミヤの手紙を、バビロンに持っていた人であります(29:3)。そしてアヒカムの子に「ゲダルヤ」がいます。エルサレムが破壊された後に、ネブカデネザルが、彼をわずかに残ったユダヤ人の上に総督として立てました(エレミヤ 39:14)。ですから、主を恐れていた人が王の側近の中にもいたということです。主が死なれた後も、その死体をアリマタヤのヨセフ、またニコデモがいましたが、同じような人々と言うことができるでしょう。

4A バビロンの枷 27

1B 諸国に対して 1-11

1C 神の主権 1-7

27:1 ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの治世の初めに、主からエレミヤに次のようなことばがあった。

この後を読むとすぐ分かりますが、おそらくこの「エホヤキム」という言葉は「ゼデキヤ」の間違いではないかと思われる。私たちは聖書の言葉は誤りがないと信じていますが、原本において誤りがないと信じています。非常にわずかではありますが写本において間違いがあることを認めています。これは、その一つではないかと考えられます。

27:2 主は私にこう仰せられる。「あなたはなわとかせを作り、それをあなたの首につけよ。27:3 そうして、エルサレムのユダの王ゼデキヤのところに来る使者たちによって、エドムの王、モアブの王、アモン人の王、ツロの王、シドンの王に伝言を送り、27:4 彼らがそれぞれの主君に次のことを言うように命じよ。『イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。あなたがたは主君にこう言え。27:5 わたしは、大いなる力と、伸ばした腕とをもって、地と、地の面にいる人間と獣とを造った。それで、わたしの見る目にかなった者に、この地を与えるのだ。27:6 今、わたしは、これらすべての国をわたしのしもべ、バビロンの王ネブカデネザルの手に与え、野の獣も彼に与えて仕えさせる。27:7 ..彼の国に時が来るまで、すべての国は、彼と、その子と、その子の子に仕えよう。しかし時が来ると、多くの民や大王たちが彼を自分たちの奴隷とする。..

この章では、「なわとかせ」という行動をもってエレミヤが預言を行なっています。25章でも話したように、バビロンの力が高まっていることによって、ユダの国の周囲の王たちも軍事的な協力をすべく外交を活発化していました。そうして使者たちがエルサレムに来ているのです。その彼らにイスラエルの神の働きについて伝えるために、「大いなる力と、伸ばした腕とをもって、地と、地の面にいる人間と獣とを造った。」と主は言われています。そして、これらのものを主なる神がネブカデネザルに与えていると言われています。再び、ネブカデネザルを「わたしのしもべ」と呼ばれて

います。そして、七十年と言っていませんが、「彼の国に時が来るまで、すべての国は、彼と、その子と、その子の子に仕えよう。」という言葉で言い換えておられます。このようにして、バビロンのくびきを今、負いなさいと勧めておられるのです。

2C 反逆への警告 8-11

27:8 バビロンの王ネブカデネザルに仕えず、またバビロンの王のくびきに首を差し出さない民や王国があれば、わたしはその民を剣と、ききんと、疫病で罰し、**主の御告げ**。彼らを彼の手で皆殺しにする。27:9 だから、あなたがたは、バビロンの王に仕えることはない、と言っているあなたがたの預言者、占い師、夢見る者、卜者、呪術者に聞くな。27:10 彼らは、あなたがたに偽りを預言しているからだ。それで、あなたがたは、あなたがたの土地から遠くに移され、わたしはあなたがたを追い散らして、あなたがたが滅びるようにする。27:11 しかし、バビロンの王のくびきに首を差し出して彼に仕える民を、わたしはその土地にいこわせる。**主の御告げ**。こうして、その土地を耕し、その中に住む。』

興味深いことに、エルサレムだけではなく、諸外国にも偽の預言を行なう者たちがいたということです。彼らは異教を信じていますが、その異教の中で「占い師、夢見る者、卜者、呪術者」が、バビロンに齒向かって構わないという託宣を告げていたのです。このようにエレミヤは、エルサレムとユダに対する預言者だけでなく、万国の預言者と呼ばれていました。主が彼を召された時に、「1:10 見よ。わたしは、きょう、あなたを諸国の民と王国の上に任命し、あるいは引き抜き、あるいは引き倒し、あるいは滅ぼし、あるいはこわし、あるいは建て、また植えさせる。」と言われていました。

2B 王と祭司に対して 12-22

そして再びゼデキヤ王に預言を戻します。

27:12 ユダの王ゼデキヤにも、私はこのことばのとおりに語って言った。「あなたがたはバビロンの王のくびきに首を差し出し、彼とその民に仕えて生きよ。27:13 どうして、あなたとあなたの民は、バビロンの王に仕えない国について主が語られたように、剣とききんと疫病で死んでよかろうか。27:14 『バビロンの王に仕えることはない。』とあなたがたに語る預言者たちのことばに聞くな。彼らはあなたがたに偽りを預言しているからだ。」27:15 「わたしは彼らを遣わさなかったのに、**主の御告げ**。彼らは、わたしの名によって偽りを預言している。それでわたしはあなたがたを追い散らし、あなたがたも、あなたがたに預言している預言者たちも滅びるようにする。」

偽預言者が、ゼデキヤを惑わしているのが分かります。

27:16 私はまた、祭司たちとこのすべての民に語って言った。「主はこう仰せられた。『見よ。主の宮の器は、今すみやかにバビロンから持ち帰られる。』と言って、あなたがたに預言しているあな

たがたの預言者のことばに聞いてはならない。彼らはあなたがたに、偽りを預言しているからだ。27:17 彼らに聞くな。バビロンの王に仕えて生きよ。どうして、この町が廃墟となってよからうか。27:18 もし彼らが預言者であり、もし彼らに主のことばがあるのなら、彼らは、主の宮や、ユダの王の家や、エルサレムに残されている器がバビロンに持って行かれないよう、万軍の主にとりなしの祈りをするはずだ。

祭司たちも、偽預言者によって惑わされていました。神の宮にある器が、エホヤキンの捕え移された時に持ち去られましたが、彼らはそれらがすぐに戻ってくると預言していました。こうやって、バビロンに抵抗することを煽っていたのです。そして、彼らが偽預言者であることの根拠も示しています。「彼らは、主の宮や、ユダの王の家や、エルサレムに残されている器がバビロンに持って行かれないよう、万軍の主にとりなしの祈りをするはずだ。」と言っています。偽預言者らは、本当に彼らのことを思って、彼らを愛して預言をしているわけではありません。骨折って、祭司たちのために祈っているわけではありません。ただ自分自身を喜ばせたいのです。

27:19 まことに万軍の主は、宮の柱や、海や、車輪つきの台や、そのほかのこの町に残されている器について、こう仰せられる。27:20 ..これらの物は、バビロンの王ネブカデネザルがエホヤキムの子、ユダの王エコヌヤ、およびユダとエルサレムのすべてのおもだった人々をエルサレムからバビロンへ引いて行ったときに、携えて行かなかったものである。..27:21 まことに、イスラエルの神、万軍の主は、主の宮とユダの王の家とエルサレムとに残された器について、こう仰せられる。27:22 『それらはバビロンに運ばれて、わたしがそれを顧みる日まで、そこにある。..主の御告げ。..そうして、わたしは、それらを携え上り、この所に帰らせる。』

第一次、第二次のバビロン捕囚のときは、すぐに持ち出せる祭具類、また高価な金で出来たもののみをバビロンは持ち出しました。その他、建物の構造の一部になっているものや、青銅で出来た重い台などは持ち去っていませんでした(2列王 24:13)。けれども第三次捕囚で、これらも取り去られます。ダニエル書 1 章の初めにもそれが書かれており、そして 5 章においてベルシャツァルがそれらの杯を使って神々を賛美していたことが書かれています。しかし主が裁かれました。エズラ記 1 章において、ペルシヤ王クロスが自分の神々の宝物倉に保管してある主の宮の用具を運び出し、それをユダの総督に渡したことが記されています。確かに戻ってきたのです。

初めから終わりまで、今日の箇所は、「服しなさい。そうすれば、主がその願いを終わりの時にはかなえてくださる。」ということです。私たちは、今置かれているところで、主の御手を信じて服すべきです。たとえ、それが完璧ではないと思っても、自分の感情をかなえるような即時的なメッセージは受け入れるべきではありません。主は長い先を見て、私たちに幸せをかなえます。霊的成長というものはこういうことです。今、へりくだり、主がかの日に引き上げてくださいます。